平成17年度四手井綱英記念賞　選考理由書

授賞対象論文

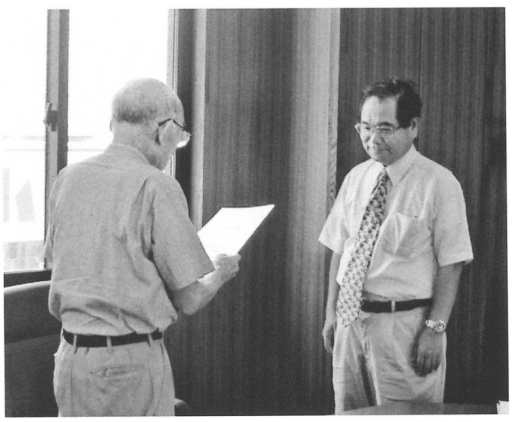
山倉拓夫・名波　哲・野田周央・伊東　明．2003

種子を運ぶ奈良の風（御蓋山ナギの分布域拡大４）．関西自然保護機構会誌25,(1)：43-54.

ほか筆頭著者らによる３編の論文.

選考理由

奈良の春日大社境内で純林を形成しているナギは国内移入種で，おそらく1000年程度の時間をかけて，現在見られるような純林を形成するに至ったと考えられている。今回授賞対象となった論文は，関西自然保護機構会誌に発表された，ナギの分布拡大の機構についての一連の研究（会誌22巻：173-184，23巻：51-63，24巻：97-112）の一部である。これら一連の研究で，著者らは御蓋山のナギ林の起源と分布拡大の機構に関する過去の研究をレビューし，さらに筆者らの最近の研究成果を含めて仮説の検証を行っている。第１報と２報では，ナギが生産するナギラクトンによるアレロパシー効果がナギ林の拡大の原因だとする「アレロパシー仮説」を検証している。 これらの論文では，シカの食害回避という面でナギの持つ忌避物質は効果を発揮しているが，現場の土壌中のナギラクトン濃度からみてアレロパシーによって他の植物種を排除することは不可能と結論している。しかし，ナギ林が一斉に倒壊したような場合には，大量のナギラクトンが土壌に供給され，それを再吸収するものが不在であるために，強力な毒性が発揮される可能性があることを示唆している。第３報と４報では，種実が何の散布機構を持たないナギが，どのように分布面積を拡大していったかを風との関連で考察している。ナギの発芽可能な種子の多くは３月から４月に散布されること，そして奈良では３月から４月に強風の発生率が安定して高いことを示した。これをもとに，風による分布拡大の可能性について論じている。御蓋山のナギは，急速に侵入定着する多くの外来種とは明らかに異なり，きわめてユニークな侵入定着の歴史と機構を持っていると考えられる。これら一連の論文におけるナギの侵入拡大についての論考は学術的に大きなインパクトを持つと同時に，ナギ林とそれをとりまく照葉樹林の今後の保全管理に対しても大きな貢献をすると考えられる。以上の理由により，四手井綱英記念賞に相応しい論文と評価した。



干地会長より四手井賞を授与される山倉氏（2005年６月26日）.

関西自然保護機構理事会　記